

University  
Current  
Review

ISSN 0288-1748 2020(令和2)年 9月20日発行 [隔月刊]

[特集] コロナ禍における大学の取り組み

# 大学時報

NO.393  
-394  
2020.

# 07-09



# 常磐大学



ギャラリー3 裁縫教授所の授業風景



ギャラリー1 シアタールーム

## 諸澤みよ記念館

創立者諸澤みよは、教育に強い信念を持ち、学校法人常磐大学の発展と女子教育に生涯をささげた。常に困難に立ち向かい、如何なる時も前進あるのみを信条とする人物であった。

創立者の精神と本学の歴史を伝えることを目的に、2006(平成18)年、開学100周年の記念事業の一環として、「諸澤みよ記念館」を開館した。みよが戦後から晩年を過ごした木造2階建ての旧邸を復元したこの記念館は、1909(明治42)年、みよが22歳で裁縫教授所を開設した、本学人淵源の地にほど近い、住宅街の中にある。

外観は、質素儉約を旨としていたことがうかがえるシンプルな佇まいである。館内に入ると、正面の胸像が目に入る。みよの毅然たる中にも温かな人柄が伝わってくる。展示室に進むと、ギャラリー1は、みよの足跡をたどるシアタールームになっている。私塾の開設から、女学校の開学、戦後の校舎再建、短期大

学の開学まで、それぞれの時代のエピソードを交えて、みよの生涯を映像で紹介している。対面のギャラリー2は、昭和初期の書齋をイメージした展示室となっており、常磐高等女学校時代(昭和初期)に校長として使用していた机をはじめ、みよが愛用した品々や当時の教本等が並んでいる。2階への階段を上がり、ギャラリー3に入ると、裁縫教授所での授業風景を再現した空間が広がる。みよの教授方法は、個人指導に加え、当時まだ珍しいとされた黒板を用いての解説授業が明快であると好評を得ていた。数多く集まった生徒たちは、民家を改造した教室の中で、熱心に裁縫授業を受けていたのである。最奥に位置するギャラリー4では、大学の開学など現代までの本学人の歩みが分かる展示が展開されている。

創立者の教育にかける情熱の濃度に圧倒される「諸澤みよ記念館」。学校法人常磐大学の教育の原点に立ち返ることができる場所である。

# 大学時報

2020.07-09 / NO.393-394

CONTENTS

94    90 86 80 76 74    64    58 50 46    38 34 32 |    16 |    10

だいがくのたから 常磐大学

大学点描 フェリス女学院大学

巻頭言 創立150周年を迎えて 荒井真

視点 同志社女子大学に息づく「改良」の精神 飯田毅

座談会 大学イメージの定着化によるブランディング

上條憲二 / 日笠完治 / 小林浩 / 司会兼高聖雄

## 特集 コロナ禍における大学の取り組み

コロナ禍の心構えー新生活様式を前向きに考えるー 出口治明

大学におけるオンライン授業の現状と課題

ー感染防止のための臨時対応から新しい大学の様式へー 福原紀彦

教育開発支援センターの遠隔授業への取り組み 関口理久子

新たに創設した奨学金による家計急変学生への支援 富田宏治

コロナ禍における学生の主体性と地域組織を活用した実践

ー人のつながりと食を通じた学生支援活動ー 大西良 / 川崎孝明

転換期の教育交流と国際教育の将来像

ーコロナ禍における教育交流のパラダイムシフトー 芦沢真五

コロナ禍の国際教育の様相と今後 内田達也

大学入学者選抜の着実な実施に向けて 多和英樹

コロナ禍でのオープンキャンパス 学生確保か、安全保持か 石川さゆり

支援を止めないーこれまでとこれからー 神山正之

コロナ禍における就職支援の展開

ー急ごしらえで準備した各種支援内容の紹介ー 松本光眞

新型コロナウイルス感染症対策における意思決定プロセスについて

ー早稲田大学の場合ー 友金孝夫



# 他者と共生する力を持った 新しい時代を切り拓く女性を育てます。

フェリス女学院は創立150周年を迎えました。

学院の創立者メアリー・E.キダーは、女性に教育など必要ないと思われていた当時の日本において、女性への教育とその活躍こそがなにより重要だと信じていました。キリスト教にもとづく女子教育を行おうとしたキダーは、まさに時代を先取りした女性。新しい時代を切り拓く女性を育てようという彼女の思いは、現在のフェリス女学院大学の教育に引き継がれています。

## フェリス女学院大学

山手キャンパス6号館屋上から撮影



# フェリスの教育理念 「For Others」～他者のために～

フェリス女学院が、これまでの歩みの中で大切にしてきたのは「For Others」という教育理念です。これは、建学以来の永い歴史の中で自然に人々の心の中で形を成し、学院のモットーとして受け継がれるようになったもの。この言葉は「他者のために」と訳すことができます。単に自分に近い人だけではなく、より広い視野から他者の存在も考えに入れて、他者のために行動することを、フェリス女学院大学で学ぶ一人ひとりが受け継いでいます。



# 学びの特色

## —教育力・国際性・創造型学習—

「新しい時代を切り拓く女性」を育成するために、フェリス女学院大学が大切にしていること。それは自主性を重視し、個人の関心に応じて履修できるカリキュラムと広く社会に目を向け、新しい興味や問題意識を喚起させる創造型の学習を積極的に取り入れていること。さらに、創立当初からの少人数教育で、きめ細かなサポートをしていくことです。



# 4年間を通じた教養教育 「全学教養教育機構(CLA)」を展開

価値・規範が流動化し、社会構造自体が変化し続ける現代において、ひとつの専門分野を学ぶだけでは新しい時代を生き抜いていくことが難しくなってきました。フェリス女学院大学は2017年度から「全学教養教育機構(CLA)」を立ち上げ、すべての学生が学部・学科の学びと並行して、言語運用能力や問題解決を図る力を養成しています。





フェリス女学院は2020年に創立150周年を迎えました。

メアリー・E. キダーが、横浜の地に日本初の近代的女子教育機関であるフェリス女学院を創立して150年。創立当初から変わらない少人数教育でこれからも「新しい時代を切り拓く女性」を育てていきます。



フェリス女学院大学

University Current Review

# 大学時報

2020.07-09 / NO.393-394



## 創立150周年を迎えて

荒井 真 フェリス女学院大学学長

アメリカ改革派教会から宣教師として送り出されたメアリー・E・キダー(Mary E. Kidder, 1834-1910)が、1870年に横浜居留地のヘボン診療所において英語の授業を開始してから、今年で150周年を迎える。女性教育を重視したキダーは、「知識を広げ、自ら思考する女性」を育てることを目指した。

本学の建学の精神は「キリスト教信仰に基づく女性教育」、教育理念は「For Others」である。この先行きの見えない時代に、自分のなすべきことを見だし、他者を慮ることのできる「新しい時代を切り拓く女性」をこれからも社会に送り出していきたい。

# 同志社女子大学に息づく 「改良」の精神

飯田 毅 同志社女子大学学長

## 1. 新島襄と同志社女子大学

はじめに、新島襄にまつわる本学の歴史上の出来事のおくつかを取り上げてみたい。

1875(明治8)年、アメリカで約10年間学んだ新島襄は彼の理想の教育を実行すべく同志社英学校を設立し、翌1876年に京都御苑内に、宣教師A・J・スタークウエザー、妻である新島八重とともに女子塾を開設した。この女子塾が本学のルーツである。1877年、新島襄が校長となり同志社女学校が開校され、その翌年、校舎を現在の今出川キャンパスの地に移転した。1879年、同志社英学校は15人の卒業生を出した。学校としての基盤を築いたかに見えたが、実際は経営的に危機的状况にあった。新島は一通の手紙をアメリカの父とも言うべきハー

デイ氏に送り、寄付を得ることで同志社は危機を脱することができた。1886年、新島は将来の医学部のために同志社病院ならびに京都看病婦学校を創設した。京都看病婦学校は、看護学校として日本で2番目の歴史を有し、アメリカで最初の訓練看護婦であったリンドン・リチャーズを迎え、当時最先端の看護教育を開始した学校である。本学の看護学部の前身である。新島は同志社英学校を創立した数年後から大学昇格運動に着手しているが、彼の生前はその日を見ることはできなかった。また、1897年に病院と看護学校は同志社理事を務め医師であった佐伯理一郎に管理が委ねられ、1906年、廃校になった。ここに取上げた出来事から読み取れるのは、新島の教育に対する熱き思いと危機に迅速に対処する態度であ

り、また創立者の思いを引き継ぐ本学の伝統である。

## 2. 新島の女子教育

同志社女子大学は2026年に創立150周年を迎える。現在約6200名の学生が近代的な京田辺キャンパスと歴史ある今出川キャンパスに通う。現在、本学は2026年までの中長期活動目標である「Vision 150」を策定し、実現すべき様々な施策を推進している。そのコンセプトは、「21世紀社会を女性の視点で『改良』できる人物の育成」である。あえて「改良」という言葉を使ったのは、新島の言葉である「世の革命者と成られよ。否世の改良者と成りて働かれたし」に依拠している。これは、1886年に発足した社会改良団体、日本基督教婦人矯風会の書記であった佐々木豊寿に対して述べた言葉である。また同時に新島は女性の権利を拡張することの重要性に触れ、そのためにはまず女生徒に、人権を重んじること、慷慨心こうがいしんを起こさせることを教えてほしいと述べている。新島が亡くなる1カ月前のことであった。生命の終わりを自覚していた新島の日本女性に対する精神的自立と社会改良事業への

積極的な参画を願う熱い思いが吐露されている。

新島は社会の発展には女子教育を盛んにすることが不可欠と考えていた。そして、彼の「女子教育は社会の母の母なり」という言葉に如実に示されているように日本の女性の権利拡張のため努力し続けた。しかしながら最初から女子教育の重要性に気付いていたわけではない。新島が生まれた江戸時代は儒教的女性観が強い時代であり、男尊女卑の女性観が支配的であった。新島はアメリカや西欧諸国に滞在することで、当時の日本人女性とは異なった独立した女性の生き方を目の当たりにした。帰国後、日本の女性の状況を見て、女子教育の重要性を認識し、「改良」を試みたのである。言い換えれば、新島の女性観は外の世界を経験することで変化したのである。

ところで、新島の使っている「改良」という言葉は明治期に英語のreformの訳語として作られた語である。英語のreformは社会、制度、政治、宗教そして人間を含めた事柄を改革、改善、刷新するという意味である。明治時代の新島はreformの訳語を忠実に使っていたことが分かる。新島のこうした改革の精神は彼の死後も本学で生き続けている。

### 3. 本学の改革とガバナンス

本学の長い歴史の中で、私自身が目の当たりにした最も大きな改革は、短期大学の改組から始まる。私は1996年に短期大学部英米語科に赴任した。その年の教授会から短期大学の四年制大学への改組転換の議論が始まった。それは驚きとともに、大学が大きく変わらざるを得ない一つの象徴的な出来事として印象深く私の記憶に刻まれている。その当時本学は学部が2学部5学科、短期大学部は2学科の体制であった。2000年に短期大学部を現代社会学部に改組転換することで、学部と生活科学部に加えて新たに社会科学系の学部を設立することができた。その後2005年に、薬学部を開設。2009年には今出川キャンパスに英語英文学科と日本語日本文学科を移転させ、表象化学学部を開設した。2015年に看護学部を設立し、現在は6学部11学科1専攻科5研究科を有する女子総合大学になった。このように本学は、常に時代の要請に応え、社会に貢献できる女性の育成のために改革を続けている。

20年以上にわたる本学の学部学科の新設および改組転換を可能にしたものは、何であろうか。今、改めて本学の

歴史を振り返る時、前述した新島の教育に対する熱意、危機に対する態度、そしてその新島の思いを受け継ぐ伝統が、本学の中に生き続けていることが挙げられる。さらに、私は本学のガバナンスがしっかりと機能していたためであると考えている。

2014年の学校教育法の改正によって、教授会の役割が明確化され、また学長の権限が強化されたことは記憶に新しい。この法律改正の真の目的は、大学における権限と責任の所在を明確にすることにある。国立大学が法人化された中で、依然として大学における責任と権限の曖昧さが残っていたからである。言い換えれば、大学におけるガバナンス改革である。ガバナンスという用語は、様々な意味で使われている。中央教育審議会大学分科会の「大学のガバナンス改革の推進について（審議まとめ）」では、ガバナンスを「教学及び経営の観点から、法令上設けられている各機関（学長、教授会、理事会、監事等）の役割や、機関相互の関係性」と定義されている。その意味で言えば、本学のガバナンスは学校教育法改正以前から明確であった。特に、教育研究に関する事項について2つのキャンパスの専任教員が一堂に会して審議する教授会、学長の下で全ての学部長

を含む事務機構上の部長によって構成され、制度・予算・施設・人事等を提案する常任委員会、そして学長がそれらの事項について諮問し、了承を得る評議会というように本学の組織においては、責任の所在と権限、そして役割や相互の関連性が明確である。それに加えて、全学生数の約半数の女子のみを入学者の対象としているという現実に対する危機意識も改革の原動力の一つになっていると思われる。

しかし、ガバナンスはあくまでも制度であり、それを動かすのは人である。大学のガバナンス改革は目的ではなくあくまでも手段である。言うまでもなく、大学の目的は、教育、研究、そして社会貢献であり、社会から期待される役割を果たすことにある。迅速かつ効果的に大学改革を推進させるためには、学長のリーダーシップの下、教職員の理解と協力が不可欠である。2019年学長に就任した私は学長の権限が強化された分、教職員同士および教職員との対話(Dialogue)が何よりも重要であると考え、その対話の中から他にはない独創的なアイデア(Idea)を生かし、学生と教職員の成長(Growth)を促すことで、本学の発展を期したいと考えている。そのためにできるだけ多くの教職員との対話の機会を設けるようにしている。

#### 4. 本学の教育改革と課題

本学は3つの教育理念であるキリスト教主義、国際主義、リベラルアーツを掲げ、良心教育を核として女子教育を推進してきた。教育の改革はガバナンスの改革とは異なり、教職員の熱意と根気、時間を要し、分析と改善を繰り返しながら継続する必要がある。

2020年1月に出された「教学マネジメント指針」の目的を一言で言うならば、2018年に出された「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」の真意である学習者本位の教育の実現を達成するために行う管理運営についての方針である。この指針は、主に正課活動が対象となっているが、本学は正課外であっても学生の成長にとって重要な意味を持つと思われる活動も対象としている。ここでは本学の教育理念と教育の特徴を紹介し、教育改革とその課題について考えたい。

新島はキリスト教主義を通して「良心を手腕に運用する人物」の育成に努めてきた。これは単に技術や才能ある人物を育成するだけでなく、キリスト教主義を徳育の基本とする考え方である。この考え方の下、「聖書」を各学部部の必修科目とし、年間を通してほぼ毎日1講時と2講

時の時間割の間に礼拝の時間を設け、本学の教職員、学生、また、卒業生を含めた社会で活躍する人々を招いて話をしていただく奨励の機会にしている。礼拝は宗教部が中心となつて実施している。他にも宗教部の主催するリトリート等の様々な取り組みや行事を通して「自らのためだけでなく、他者のために学び生きる」という本学のキリスト教主義精神を広めている。2015年には宗教部にボランティア活動支援センターが誕生し、学内外におけるボランティア活動を進めている。しかし、果たしてキリスト教主義教育の成果を正確に把握し、可視化することは可能だろうか。このことは教学マネジメント指針でも、全ての学修成果・教育成果を網羅的に把握することはできないとしている。当然のことである。全ての活動の可視化には限界があるが、その中で学生の成長実感、満足度などを収集し、活動を改善していくことが重要である。

もう一つの本学の教育理念は国際主義である。国際化に当てはまる英語で Globalization と Internationalization がある。前者は、制度や文化を平準化して、単一の尺度で物事を進めようとする一面を持つのに対し、後者は制度、慣習、言語、文化等を異にする国(地域)同士、あるいは人

間同士の相互の違いを認めたと上で尊重するという意味を持つ。本学の国際主義の英語訳は Globalism ではなく Internationalism である。互いを理解し、違いを認め合い、尊重した上で交流を深めることであり、ひいては国際平和に寄与することである。

現在本学の海外協定大学数は13カ国にわたり合計69大学存在する。日本は少子化であるが、世界の学生数は増加の傾向にある。特にアジア諸国では学生数の増加が著しく、世界中の大学がアジアの留学生を獲得しようとしている。英語は現在国際共通語と言うべき言語となっているが、実はアメリカ、イギリスを中心とした英語圏の話者は増えてはいない。アジア諸国では自国の言語に加えて、英語をもう一つの言語として学ぶ学習者が増えている。英語を共通言語として本学の学生がアジアの学生と英語を通して理解し合うことができるのである。そのような中で、本学の学生がアジアからの留学生と共に学び合う機会を設けるための新たな制度や方法を考える必要がある。

三つ目は、リベラルアーツの精神を生かした学びである。本学の英語名は Doshisha Women's College of Liberal Arts (DWCLA) である。学部学科の専門分野の

知識や技術はもちろんのこと、世の中の動きを知ると同時に多様な分野の学問を修めること、そして、批判的思考力を身に付けるという意味で、リベラルアーツは極めて重要な理念である。それに加えてどの分野の学問を専攻する場合にも、また社会のどの分野に進む場合にも必要とされる、学士としての基礎的・汎用的能力の獲得が重視されている。これらの能力は学位授与方針に掲げられており、学生により良く理解してもらうために2012年度より学生に卒業までに身に付けてもらいたい10の力、略して「DWCLA10」として具体的に表現し、シラバスにも入れ、学生自身もどの程度身につけたかを評価している。6学部11学科の現在、改めて本学におけるリベラルアーツとは何かということが問われている。

2015年、本学における女子教育の推進を目指して、女性アクティベーションセンターが開設された。その目的は、主に卒業生や在学生を対象として、女性が生涯にわたって社会的役割を担い、能力を発揮できるよう支援と提言を行うことにある。女性のキャリア形成のためのプログラムの企画や講演会の開催、学内外機関との連携や協働により支援プログラムを実施している。昨年度、本学の

国際教養学科の主催でジェンダー研究の第一人者と言わばき講師を招いて講演会が開かれた。当日は大きな教室が学生で埋まり、熱心に耳を傾ける学生の姿を目の当たりにして、その関心の高さに驚くとともに、この分野の充実をさらに図る必要があると強く感じた。

## 5. おわりに

新島は亡くなる2日前、遺言の中で、機械的に物事を処理する危険性について述べている。大学のガバナンスや教学マネジメントについても同様なことが言える。どんなに立派な組織が出来上がっても、ただ機械的にスムーズに流れるだけでは組織は危機に瀕する。本学のFDの特徴の一つは、全学部学科の教員が集まり、学部学科の枠を越えて取り組む点にある。昨年度は、全学部の教員が4名のグループに分かれ、課題となるレポートを評価し合い、ルーブリックを作るという合同研修会が開かれた。このように地味ではあるが、真の教育の改革にふさわしい実践の積み重ねがガバナンスや教学マネジメントの枠組みを越える取り組みにつながると確信している。